

唐招提
寺所蔵

大般若経卷第六百(春日若宮経)について

歴史研究室・古文書

35年度よりの継続として、昨年度も唐招提寺聖教・経巻類の調査を行なつた。ここに紹介するのは最近同寺の所蔵になつた大般若経卷第六百1巻についてである。まず本巻の体裁・奥書全文を掲げる。

紙本墨書 料紙黄楮紙 卷子本(もと折本、卷子本に改装されたのは最近である) 墨界線 表紙・軸新補(改装時) 巻首尾に「春日若宮社」の墨書がある。奥書中「廻向貴賤輩交名」8行目の次に3行分の別紙を継ぎ、1行を補入するも2行分は余白のままとなつてゐる。縦23.7cm 全長861.0cm 紙数20枚 界高20.5cm 界巾1.9~2.0cm 一紙長50.4cm(26行)

(奥書)

仁治三年八月十三日於春日若宮御前

書写了 尼浄阿

一交了

.....(紙継目).....
(以下別巻)
廻向貴賤輩 一部転読後必可被廻向

八条女院

春花門院

季行卿

権少僧都覚乘

権律師支季

法印定乘

阿闍梨源朗

尼浄覚

尼刑部卿局

大般若経卷第六百(春日若宮経)について

尼信阿弥陀仏

尼覚阿

僧覚心

尼真相

尼妙阿弥陀仏

尼覚心

尼性信

尼菩提

尼性阿

尼母阿弥陀仏

僧禅範

「又別巻」
権少僧都定嚴

.....(紙継目).....

八条左大臣殿

准后

「又別巻」
[丑秋門院

.....(紙継目).....

禅定殿下

大乘院僧正御房

大乘院僧都御房

権僧正覚遍

権少僧都清乘

権少僧都良専

乘仁得業

僧隆乘

僧教兼

僧真道

僧静専

僧躰円

僧隆実

僧忍実

僧道観

僧蓮信

僧慶俊

僧行尹

僧覚嚴

僧明恩

僧願心

僧実賢

僧行蓮

僧信西

尼浄智

二棟御方	女冷泉局	尼空如
尼二条局	尼淨戒	尼慈善
尼開蓮	尼蓮真	尼專念
尼顕性	尼葉阿弥陀仏	尼明心
尼刑部卿局	尼淨真	尼善心
尼兵衛佐局	尼勢阿弥陀仏	尼成仏
尼生蓮	尼信蓮	尼悟入
女高辻局	女一如	女但馬局
女鶴 <small>〔女長寿〕</small>	女性阿弥陀仏	〔女弥 <small>〔追筆カ〕</small> 〕
経師	仏師	番匠
塗師 <small>〔追筆〕</small>	銅細工	〔承仕観阿〕
〔栄実〕	僧忍舜	

乃至法界平等利益

本巻は巻首尾の「春日若宮社」の墨書からも明らかかなように、もと春日若宮社にあつた大般若経の中の一巻である。この大般若経は全600巻中50巻までは、それを納めた春日厨子と共に、現在根津美術館に蔵されている。本巻においては巻首尾に「春日若宮社」の墨書があるが、根津美術館の分は同文の黒印が捺されている点が異つてゐる。また各巻いづれにも、奥に尼淨阿書写奥書が加えられているが、根津美術館所蔵の巻には巻第600にあるような回向貴賤輩交名（以下「交名」と略称する）は見られない。

現存諸巻の中、巻第3には寛喜元年（1229）4月21日書写奥書、巻

第600には仁治3年（1242）8月13日書写奥書があり、本経は約13年5ヶ月の年月を費して尼淨阿が一筆書写したことが知られる。全巻書写終了後の仁治3年末頃、別人の手により二度にわたつて校合が加えられた。（註1）かくして淨阿は本経を春日若宮社に奉納したが、翌寛元元年10月本経を毎日3巻転読するための供料として大和国椎木庄ならびに伊保戸水田を寄進した。大般若経書写ならびに所領寄進の動機については厨子に陰刻された寛元元年10月日尼淨阿寄進願文・同寄進所領坪付注文によつて詳しく知ることができが、これについては既によく知られているところである。（註2）

ここでは「交名」を中心にして述べることにするが、その手懸りとして淨阿が寄進した所領の伝領關係を取上げたい。椎木庄は季行卿—子息北小路女房—妹六条局（法名寛阿）—姪尼淨阿と伝領され、また伊保戸水田は実盛—尼真如—尼淨阿と伝えられた。季行卿は藤原道綱の裔、楊梅流である。この厨子銘文によれば季行は少くとも二人の女子を持つていたことになるが、尊卑分脈には彼の女子は見えていない。但し定行（季行孫・能季子）の上には「是以下皆定能舎弟也云々」と註記があり、定行・覚乗・支季・女子（九条良通・良経母）の四人を季行の子とする説のあることを示している。中でもこの女子は同じ尊卑分脈でも九条良通の項では姿行女としてゐる。さらに室町時代初期に成立したと見られる仁和寺本系図（註3）は季行子として能季の次に定行・支季・女子（後法性寺北政所）の三人を掲げている。こうしたことから定行以下は季行の子と考うべきである。

ではこの「後法性寺北政所」（九条兼実妻、良通・良経母）と北小路

女房・六条局との関係はどうであろうか。六条局は「宜秋門院女房」であるから後法性寺北政所とは別人である。或は北小路女房とはこの北政所のことではないかと思われるが、なお検討を加えたい。

次にこの大般若経を書写寄進した尼浄阿について述べる。浄阿は六条局の姪であるから季行の孫に当る。彼女は寄進願文の中で「乞願奉始春花門院、覚阿・浄阿・真如等施主乃至結縁隨喜之輩為先」と特に春華門院の名を挙げており、密接な関係があつたことが考えられる。あるいは浄阿はもと春華門院女房であつたのではなからうか。しかし尊卑分脈中にはそれと指定しうる女子は見当らず、季行子息中誰の女子なのかは定め難い。

卷第六百奥書の「交名」中、出自の知られるものは次のとおりである。

- 1 八条女院（鳥羽皇女）
- 2 春華門院（後鳥羽皇女、母宜秋門院、八条院領伝領）
- 3 季行卿（浄阿祖父）
- 4 権少僧都覚乗（季行子カ）
- 5 権律師玄季（季行子カ、興福寺僧）
- 6 法印定乗（季行孫、定能子、興福寺僧）
- 7 尼覚阿（六条局―季行女、宜秋門院女房）
- 8 権少僧都定敲（権律師玄季子、季行孫）
- 9 宜秋門院（後鳥羽中宮、九条兼実女、春華門院母）
- 10 八条左大臣殿（九条良輔―兼実子、八条院猶子）
- 11 禅定殿下（九条道家）

大般若経卷第六百（春日若宮経）について

- 12 大乘院僧正御房（円実―道家子、当時興福寺別当、大乘院門跡）
- 13 大乘院僧都御房（尊信―道家孫、教実子、後に大乘院門跡）
- 14 権僧正覚遍（光明院、後に興福寺別当）
- 15 二棟御方（季行曾孫、定能孫、親能子、將軍頼経側室、頼嗣母）

以上のようにこの交名には最初に浄阿と関係深い八条院・春華門院をあげた後、祖父季行以下の一族が記され、次いで宜秋門院ならびに九条家関係者、興福寺僧、二棟御方以下の女人尼衆が名を連ねていることがわかる。即ちこの交名は明らかにしうる限りでは主として季行一族、九条家一族、興福寺僧の3グループに大別されるようである。その中で興福寺僧については、この大般若経の寄進を受ける側ではあるが、大乘院僧正・同僧都は共に九条家の出身であり、本経と九条家との関係はなかなか密接なものがある。また、或は浄阿が仕えたかと思われる春華門院は九条兼実の女宜秋門院の子で、しかも九条家と関係深かつた八条院の遺領を伝領している。しかしこうした点だけで浄阿と九条家との関係ができたのではない。季行一族中には後法性寺北政所を始めとして九条家と関係深い人々が少くない。

季行一族中、九条家と関係のあつたことが知られるのは後法性寺北政所、六条局（覚阿）、宜秋門院女房対御方、宜秋門院大宮局、二棟御方であるが、前の二人は季行子、後の三人はいずれも定能（季行子）子又は孫に当つている。こうしたことから考えると季行一族、とくにその中でも定能の系統が九条家と密接な関係を持つていたということができよう。したがつてこの「交名」に、季行一族と並んで九条家の人々の名が多数見えているのもこのような両家の関係によるものとい

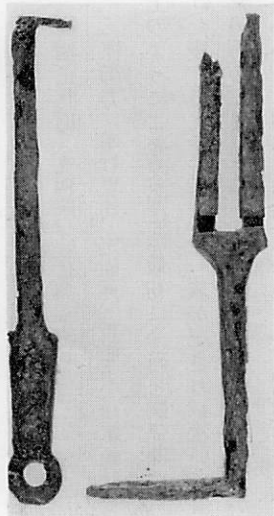
えよう。

以上浄阿と「交名」に名を連ねている人々との関係について考察を加えた。なお問題も残っているようではあるが、それについては別の機会に譲りたい。

註

- (1) 卷107—仁治3年11月13日校合奥書
卷108—仁治3年12月14日校合奥書
- (2) 荻野三七彦「板に刻んだ文書」(日本歴史199号)
- (3) 平城宮発掘調査報告Ⅲ 34頁参照
- (4) 六条局の他は尊卑分脈による。

(田中 稔)



海老錠



緑釉軒丸瓦

平城宮第32次調査出土品(本文39頁参照)